第２章

男性役割から不妊と家族を考える

――上エジプト出身者との出会いから――

岡戸　真幸

はじめに

エジプトの男性不妊や生殖補助医療を扱うこれまでの研究では，病院をおもな舞台として，その医療を受けたり，希望したりする者たちを対象としてきた。しかし，自身の不妊を疑う男性のなかには，治療を受けると決めて病院を訪れる者ばかりではなく，実際は，さまざまな社会的背景で，受診しない選択をする者も多いはずである。

生殖補助医療は多くの国で，子どもをもつための医療として普及してきた。この医療で用いられる技術は，どの国でもそれほどのちがいはないと考えられるが，その技術をいかに利用するかはそれぞれの国の社会や文化によって異なるだろう。エジプト男性が治療を躊躇する背景は，より広い社会的文脈で，彼らが家族のなかで果たす役割とは何かをみていくなかで明らかにしなければならない。男性不妊は，エジプト社会での男性の理想像とのずれにより問題化していくと考えられる。その先に生殖補助医療は求められるのである。

筆者は，エジプトで農村から都市への出稼ぎ労働者や，その他さまざまな目的で都市に来た者やその子孫たちの都市での生活と出身地とのかかわりを調査してきた（岡戸 2012; 2015）。調査対象者の出身地である上エジプ

トは，ナイル川の上流にあるためこう呼ばれるが，エジプト南部に位置し，同国のなかでも拡大家族のつながりを人間関係の基盤とする伝統的な家族観が根強く残っている。また，伝統的な男性像として，力強さや気前の良さが強調されてきた地域であり，映画やテレビでもそうした人物像が描写されてきた（Sonneveld 2012, 77）。この拡大家族像は，男性不妊を考える出発点として，病院の外側に広がる世界を知る契機になる。

本章で扱う事例は，先行研究のような医療を中心としたものではないが，エジプトでの男性不妊を多角的にとらえるための，ひとつの視点を提供できるだろう。筆者は，調査地で同性である男性とのつきあいが多く，長年の調査期間で，独身であった者たちが結婚し，子どもをもうけるような機会に出会ってきた。エジプト第2の都市で地中海に面したアレクサンドリアでの調査対象者とのつきあいは長いが，彼らに家族や子どものこと，結婚観について調査を行ったのは，2015年と2016年の夏季に，それぞれ2週間ほどであった。

本章は，Ⅰでエジプトの家族を理解するために，伝統的な家族観を説明するとともに，家族形態に変容をもたらした二つの時代状況について解説し，Ⅱで家族における男性の位置を，子どもとの関係，相続や扶養義務から整理する。そして，Ⅲで，生殖補助医療という新しく登場した医療と男性とのかかわりについて，とくに男性不妊がどのようにとらえられるかを含め，エジプトの現状を説明する。「おわりに」では，エジプトの拡大家族の意義をその成員どうしの人間関係から考えるとともに，夫婦の関係のあり方を生殖補助医療の利用をとおしてまとめていく。以降で詳述するように，男性が家族のなかで果たす役割に不妊が与える影響は大きい。生殖補助医療がいかに男性不妊に応えていけるかをエジプト社会の背景をみていくなかで考えていきたい。

Ⅰ　家族に変容をもたらした二つの状況

伝統的な家族観について

本項では，エジプトの家族を考えるうえで，伝統的な家族観について説明する。家族が同じ家に住むという生活実態を中心とした世帯と同義ととらえた場合，家族とされる集団の広がりは限定されたものとなる。その世帯で起こった問題は，その当事者と想定される夫と妻のあいだでおもに解決されるようになるだろう。

しかし，エジプトで家族とされる集団は世帯だけにとどまらず，世帯を超えた広がりのなかでも認識され，子をもつかどうかは，夫婦二人のあいだの問題として必ずしも考えられてこなかった。それだけでなく，夫婦二人という社会的単位はエジプトでは存在しない，とエジプトをはじめとした中東各国で不妊女性の生活実態や生殖補助医療を研究してきたマルシア・インホーンは述べている（Inhorn 1996, 91）。

エジプトでは，おもにアーイラとウスラという二つの伝統的な家族観がある。このうち，アーイラは，複数世代にわたる父子，または父を同じくする兄弟関係にある者と彼らの配偶者と子どもを含む父系親族からなる家族を指し，拡大家族とも説明される。また，居住を前提とせず，父系のつながりにより成り立つため，何世代にもわたる多くの成員が，アーイラへの帰属を主張できる。日本におけるアーイラ研究は，おもに農業のように多くの労働力を必要とする生業形態と結びつけて語られてきた（木村 1973; 中岡 1970; 1973）。

それにたいして，居住をともにする一組の婚姻関係にある男女とその子どもからなる単位を指すのがウスラであり，世帯または単に家族と訳される。エジプトで家族計画というときの家族は，ウスラが使われる。以下では，とくに言及しない限り，「家族」は，世帯としてのウスラの意味で用いている。エジプトにおいて，男性は，社会的に自身の妻と子どもからなるウスラとしての家族を養う責任があるとされ，さらに広いアーイラとし

ての拡大家族の一員として，成員間で助け合う義務があるとされている。

アーイラのような伝統的な家族観は，男性不妊や生殖補助医療における男性のかかわりを考える際に，ひとつの焦点となるだろう。男性の周りのアーイラにもとづく家族成員は，男性に治療を受けさせるよりも，彼には問題がないとして離婚を迫るだけでなく，父系を絶やさないために別の女性との再婚を勧め，子をもたないという選択肢を排除するのである。

1960年代からの家族計画

本項では，おもに1952年革命前後からムバラク政権期（1981～2011年）にかけて，家族がいかに扱われたかを詳述する。家族形態に変容をもたらしたと考えられる二つの時代状況として，まず家族計画を説明し，次の項で出稼ぎに焦点を当てる。

先述のように，世帯を超えた家族構造としてのアーイラは，年長の男性を中心にした階層的な家族関係としての家父長制によって支えられてきた。家父長制は従来，女性を抑圧する制度としてみられてきたが，男性にも家族をもち，父系の系譜を継ぐ男子をもつことを強いる側面があった。男性不妊を考えるときに，その点も考慮に入れ，家族計画により，伝統的な家族観がどのように影響を受けたか説明していく。

家族計画は国家による家族関係への介入であるが，家族にたいする統治上の関心は1952年革命を経て形成されたわけではない。すでに19世紀前半に，オスマン帝国でエジプト総督の地位につき，近代エジプトの基盤を築いたムハンマド・アリーは，より小規模の住宅の建設を推奨することにより，世帯の分割を促した。彼に敵対する勢力の形成を阻止するために，アーイラの解体が必要だと考えたのである（Pollard 2005, 9）。

その後，1922年にイギリスからエジプト王国として独立後，戦間期のエジプトでは，近代国家を建設するにあたり，家族は近代化の具体的な対象として扱われるようになった。家族は，国民の管理の手段として位置づけられ，さまざまな改革の対象にされた。とくに，育児を担う母親への衛生教育は，家庭内での子の教育と同様に重視され，国家の発展と結びつけ

て考えられた。一方，1930 年代からあった人口問題にかんする議論は，人口増大が国家の力になるとも考えられたために，この時代にはまだ家族計画による抑制には向かわなかった（El-Shakry 2007, 145, 166-167, 174-175）。

しかし，1952 年革命以降，人口増加が人々の生活水準を下げ，かぎりある資源の枯渇を招くとの議論がなされるようになった。ナセル政権（1956～1970 年）は，当初は家族計画導入に消極的だったものの，高まる人口圧力の前に，1965 年に家族計画にかんする最高評議会を設立し，出生率の抑制に向けた対策を講じ始めた（Ali 2002, 30-31）。

家族計画は，国家社会主義による社会福祉を重視したナセル政権期から，1970 年代の社会経済的発展をめざしたサダト大統領の時代（1970～1981 年）に入ると，新たな局面を迎える（El-Shakry 2016, 176-177）。エジプトが進める経済改革において，人口抑制は，生活水準や教育の向上における指標になり，世界銀行などの国際機関からの融資を引き出すための重要な課題として注目されるようになった。1980 年代に入ると，同国に経済援助を行ってきた米国国際開発庁（USAID）がエジプトの家族計画を援助し，避妊具や避妊方法の教育の普及を後押しした（Ali 2002, 32-33）。

また，サダト政権は，家族計画をとおして，ほかの親族から子どもを産むようにとの圧力を受けない，自らの決定権をもった近代的な家族像の創出をめざした（Ali 2002, 123）。政府がめざしたのは小規模な家族構成であり，核家族の範囲内で個人と国家のあいだに新たな関係を構築しようとした（El-Shakry 2016, 178）。つまり，アーイラのような，家長である男性がその成員を管理統制するような家父長制を解体し，国家がその元首をもって家長のような存在になり代わろうとしたのである。

家族計画の推進により，男性は，適切な子どもの数や，その子どもにたいする経済的な責任についての認識をもつようになったといわれる（Ali 2002, 134）。それだけでなく，彼らは妻の健康を考え，当初は拒んでいた避妊を受け入れるようになったのである。家族計画は男性の意識を変え，彼らに自身の経済状況に適した家族規模を考えさせた。

ナセル政権下では，近代化に向けて工業の国有化を推進し，人口抑制と

工業化によって国家の近代化がなされると考えられた（El-Shakry 2007, 200）。工業化政策は，農業のように家族成員の労働力を家長が管理し，共同で労働を行うアーイラ的な拡大家族を必要とせず，個々人が独立した労働力として工場の経営者の下で働くかたちを推進した。結果として，ウスラ的な核家族の形成が国家によって促進されたとみられる。農業以外の生業が選択肢としてできることで，経済単位としての家族の分割が進んだのである。この分割は，後述するように，海外出稼ぎ労働者が増えると，労働者が得てきた収入をめぐってさらに進むようになる。

家族計画は都市部から農村部へと順調に浸透していった。その結果，ひとりの女性が生涯に産む子の数である合計特殊出生率は，統計のある1976年に6.5だったのが，2008年には3まで下がった（CAPMAS Various years）。だが，2015年の段階では3.3と横ばいで推移している（巻末付録表付-1参照）。家族計画の普及によって，子どもの人数が多い拡大家族は見直され，とくに都市部で縮小傾向にある。

家族計画による子どもの数の減少は，新たに生まれた息子たちの世代にとって，父を長とする拡大家族であるアーイラ内の世帯数が少なくなるだけでなく，エジプトで好まれてきた父方オジの娘を配偶者にする父方平行イトコ婚での結婚相手がいなくなる可能性も意味する[(1)]。とくに，男子が生まれなければ，父系の系譜が途絶えてしまう。つまり，父系の拡大家族であるアーイラの形成が困難になる可能性がある。

1970年代以降の出稼ぎと経済不況

男性は，家族成員を扶養する役割を社会的に期待されている。その役割を果たすため，エジプトよりも高い賃金を得られる産油国への出稼ぎは，独身男性にとって短期間で結婚に必要な資金を貯める手段として，また既婚男性にとっても家族の生活水準をあげたり，さらに稼いだ賃金を子への教育費用に充てて，彼らの社会的上昇を助けたりする手段として，注目を集めた。1974年のサダト大統領による門戸開放政策は，海外出稼ぎにたいするそれまでの規制を緩和し，多くの男性に海外に渡航する機会を与え

た。

海外出稼ぎの増加の背景には，家電製品などのさまざまな商品があふれる消費社会の登場により，より多くの現金を稼ぐ必要が出てきたこともある。男性は，そうした社会変化のなかで，年齢を重ねるごとに，独身でいるよりも結婚して子どもをもち，仕事をもって定期的な収入を得，家族を養うことを，これまで以上に求められるようになった（Ghannam 2013, 71）。

また，結婚が多額の婚資を必要とし，結婚式などの費用が高額になったことも，結婚をのぞむ男性をより賃金の高い国に向かわせた。こうした結婚観は世代間格差が存在し，ひとつ前の世代で，1970 年代に結婚した調査対象者は，結婚した後に家電製品など必要なものを買いそろえればよかったが，今日では彼らの息子や娘たちが結婚する際にはそれらがそろっていないと結婚できなくなり，お金がかかるようになったと話していた。

従来，経済的な助け合いは，世帯の範囲を超えたアーイラを単位として，出稼ぎ当事者の父や兄弟，父方オジなども対象に行われてきた。しかし，出稼ぎ当事者が限られた送金しかできない場合，彼の賃金は，彼の世帯（ウスラ）に優先的に充当される（Hoodfar 1996, 62-63）。この結果，経済面で，自身のアーイラ成員全体にたいして相互扶助を基盤にしたつながりを維持できず，アーイラの規模が縮小してしまう可能性がある。

現在の経済状況に目を向けてみると，海外の出稼ぎ労働者からの送金によってもエジプト経済は根本的な回復へは向かわず，過去数十年間進めてきた構造調整政策のもとで低迷を続けている。男性のなかには，この経済状況で結婚するための資金を貯められず，結婚によって果たされるとされる男性の社会的役割を全うできない者もいる。

調査対象の若者のなかには，海外出稼ぎに出るが失敗し，結婚資金が貯まらない者や，父親がすでに亡くなっており，自分が家族を養わなくてはならず，結婚をまったく考えられない者もいた。まだ結婚していない男性に結婚についてたずねると，結婚する気があっても，「お金がないんだ」と顔をしかめて肩をすくめられる場合が多い。お金は，彼らに一生ついてまわる問題である。彼らは，結婚の先に子どもをもつかどうかを考える余裕ももてず，男性不妊が問題化する段階まで至らないのである。

結婚によって，男性は自身の家族を扶養する義務を新たに負うが，失業や，賃金が物価上昇に追いつかず，家族の経済的な担い手としての役割を十分に果たせなくなっている。経済的な役割にはさまざまなものがあるが，なかでも食料の供給は，Ⅲで紹介する男性のもうひとつの役割である精子の提供者としての役割にも影響を与えている。男性に活力を与えるとされる肉を充分に購入できる収入がないことが，自身が満足に性行為を行えないことに結びつくと悩む男性もいる。(Ali 2002, 132-133)。経済的な低迷は，男性が自らの役割を果たせない危機的状況をもたらすことで，男性の存在意義を揺るがし，彼らを苦境に陥れるのである。

後述する生殖補助医療とのかかわりでは，保険がきかず，自費診療になるため（Mansour, Abou-Setta, and Kamal 2011, 5），結婚後も子どもができない場合，高額の医療費を賄うために経済的に苦しむ男性もいるだろう。次節以降では，男性の家族のなかでの位置を考えていくが，男性が自身に与えられた役割を果たせるかどうかは，つねにエジプトの経済状況と密接にかかわりをもっている。

Ⅱ　エジプトの家族における男性の立ち位置

子どもをもつことの意味

政府が後押しする家族計画の浸透によって，核家族化が進み，子どもの数は減ってきているといわれているが，各家庭の子ども数には幅があるのが現状である。筆者が調査した出稼ぎ労働者は上エジプトの農村出身であるが，男だけで三人兄弟の者も多くいた。それだけでなく，年が離れている兄弟をもつ者もおり，六人兄弟の末っ子である出稼ぎ労働者は長兄と20歳も年が離れており，長兄の息子との方が年が近いということもあった。「こいつは，俺のことをオジとして敬わないんだよ」と，イトコと勘ちがいしそうな同年代の若者どうしが話すこともある。また，最初の妻が亡くなった後に再婚して子どもをもうける事例もあり，異母兄弟も多くみ

られた。

先述のように，アーイラとは父系のつながりをもとに関係する者たちの集団である。すべての男性は，男系子孫をもつことによって，自らのアーイラの始祖になる資格を得る（大塚 1983, 567）。エジプト人にとって家族とは，婚姻関係にある男女を含むとともに，世帯を超えて広がる父系の血のつながりを明確にもった者たちの集まりとして認識されているのである。

エジプトにはムスリム（イスラーム教徒）のほかにキリスト教徒が人口の 10％程度存在するが，両者の家族観はおおむね同じと考えられる。いくつかの考え方のちがいとしては，たとえば，ムスリムは，乳兄弟の考えをもち，自分が乳をもらった女性から乳をもらった彼女の子は実の兄弟姉妹と同じと考えられ，結婚できない，と考える。だが，筆者が話を聞いたキリスト教徒の男性は，乳兄弟には否定的で，彼の妻は隣人の奥さんが乳の出が悪かったため，隣人の子に授乳したことがあったが，それでその子と自分の子が将来結婚できないということはない，と話した。

また，家族観について，ムスリムの 60 代の調査対象者は，父系のつながりであるアーイラとともに，「シラトラヒム」，すなわち母の子宮を介したつながりもあると説明した。彼の説明によれば，彼と彼の兄弟は，ひとりの母親から生まれたという結びつきをもっており，その結びつきはお互いが父方イトコどうしになる彼らの子どもたちにも適用されるのだという。つまり，系譜は父系であるが，彼らどうしの結びつきは，ひとりの母から生まれた子孫であるかによっても考えられ，その範囲は父系以外の親族まで広がるのである。この言葉は，家族成員どうしの絆の固さを語る際に使われ，クルアーン（コーラン：4 章 1 節）や預言者の言行録であるハディースでも言及されている。キリスト教徒は，こうした言葉は使わないが，離婚がなく，複婚もない自分たちは家族の絆が強固である，と上述の乳兄弟について話してくれた男性は語った。

この二つの事例から，とくにムスリムは，お互いの関係性を，母乳や母の子宮などの特定の身体を構成する要素をとおしても確立しているとみられる。つまり，家族成員どうしがお互い固い結びつきをもっており，共通

の出自を意識しているという考え方は，宗教によらず存在するとみてよいだろう。

つぎに，家族のなかにおける子どもの位置づけを考えたい。先行研究では，夫婦に子どもを期待する社会的圧力がしばしば言及されてきた。エジプトは，子をもつことに高い価値をおく社会であり，結婚後にあまり間をおかず妊娠し，第一子を出産することへの周囲からの関心と圧力は高い。カイロで調査を行った人類学者のファルハ・ガンナームは，彼女が結婚後に入ったフィールドで，子どもをもつことにかんする周囲の関心の高さと8年後に彼女自身が娘を授かったときの周囲の喜びについてふれている（Ghannam 2013, 180-182）。

ガンナームは，不妊とは，結婚と家族・親族関係に緊張を強い，すべての労力をかけてとり組まねばならない主要な社会的問題であると述べている（Ghannam 2013, 40）。つまり，子をもつかどうかは夫婦二人だけで決められる問題ではない。また，エジプトは父系社会であり，夫方居住をとるかそれに近い場合もあるため，結婚した女性の家庭内での地位は子の誕生によって確立するといった見方もある（Inhorn 1996, 4）。

調査対象者のうちで，結婚して1年後に子どもができた者は多い。2015年と2016年に短期で現地を訪れた際，結婚して1年が経過した5組の新婚夫婦は，ひと組を除いて子が誕生している。そのひと組も，妻が学業継続中だという理由があった。第二子以降の出産は，夫婦のあいだでおもに考えられるようで，「いまの子に十分に愛情を注いでから考える」と答える者もいれば，すぐに第二子をつくろうとする者もいる。ただし，教育費を理由に2～3人で十分と答える者が多かった。

また，結婚は，子の誕生によって確かなものになるとされる。2人以上の子ども，とりわけ息子がいることで，夫は家庭に結びつけられ，自分に課された経済的義務を果たすようになるといわれる（Hoodfar 1999, 248）。ただし，子が誕生しても，夫は家庭に結びつけられるとは限らず，妻と離婚する場合もあり，結婚においては子どもだけではなく夫婦間の愛情ももちろん重視されるといった指摘もある（Inhorn 1996, 126）。

息子偏重の理由は，エジプトが父系社会であること，母親が息子からの

経済的な援助を将来期待できることにある。さらに，息子は，次世代における一家の長として，自身の父親の死に際し，葬儀を執り行い，弔意を受ける役割を果たすために必要な存在であるともいわれる（Ali 2002, 128）。

しかし，生活の援助や家事手伝い，弟や妹の世話をしてくれるのは娘であり，母親のなかには娘を望む者も多い（Hoodfar 1999, 247-248）。さらに，最近のカイロでは，介護や精神的な支えの面で娘を熱望し，息子だけでは寂しいと思う女性もいるようである（Ghannam 2013, 181）。母と娘の絆は，娘が結婚後不妊とわかったときに婚家の圧力から守り，娘の苦境に共感を寄せる際にも発揮される（Inhorn 1996, 180）。母娘の関係は結婚後も続くのである。

親と子との直接的な関係以外にも，子をもつ社会的な意味は存在する。父親にとっても，母親にとっても，結婚して子どもができれば，その子どもの親としてそれぞれ「誰々の父」（アブー～）または「誰々の母」（オンム～）と呼ばれるようになる。こうした呼称法は，アラビア語でクンヤと呼ばれ，一種の尊称として本人の名前を直接用いず，社会的認知にもとづいて呼ぶ用法で，エジプトでは広くみられる。彼らに付けられる子どもの名前は，それが男子でも女子でも第一子である場合が多い。

エジプト人は，結婚して子をもつと，子どもの頃から呼ばれてきた名前ではなく，その子の親として呼ばれるようになる。クンヤによる呼称は周囲から社会的な立場にある者とみなされたことを示しているが，筆者はさらに，祝福の意味合いもあると考えている。また，子の名前で呼ぶ者は，本人だけでなく子どもについてまで知っているのであり，それだけ自分が相手に近しい者であると周囲に示せるのである。

筆者は調査で出会ったある母親に，すでに亡くなった子の名前で「誰々の母」と呼ばれたい，それは，その子の思い出を保つためだと言われたことがあった。エジプト映画『ハサンとマルコス』のなかでは，地方に移り住んだ聖職者である主人公が村人から祈禱を頼まれる場面で，依頼者として不妊女性が登場する。彼女は「オンム・イブラヒーム」（イブラヒームの母）と名乗るが，それは，将来子どもが生まれたら，「イブラヒーム」と名付けるのだということであった。これらの事例は，相手からの呼ばれ方

に，社会的な責任をもつ人の親であるという認知だけでなく，社会に自分をどう呼んでほしいかという願望もあることを示している。

エジプトでは，個人の名前は自身の名・父の名・祖父の名の三つで基本的に構成されており，また，さらに家名が続く場合もある。個人は，この父系の系譜に自身を位置づけ，他者との関係を構築している（大塚 1983, 567）。家族は父系の系譜にもとづいて構成されているが，それが名前にも表れているのである。そのため，父親は，自身の息子が結婚すると，自分の名を継ぐ孫の誕生を心待ちにし，とりわけ，将来自分の名前を次世代に継ぐ存在になる男の孫を期待する。エジプトのことわざでも，「子どもよりも価値がある（かわいい）のは，子どもの子どもである」といわれるほどである。

相続と養子について

エジプト人の家族を考えるうえで，相続は家族成員の人間関係を理解するひとつの指標になる。故人の遺産が家屋や土地，現金，さらには故人が商人であれば店舗など，多岐にわたり多額になると，その配分をめぐり争いが起こる場合がある。その際，故人との親等は相続順位として重視される。法律で定められる相続順位は，クルアーンに依拠して決められたが，まず故人の法定相続人（故人の夫または妻，父，母，娘など）が優先され，それから父系の男性親族（息子，兄弟など）が続く。この両者が存在しない，または遺産の残余がある場合，女系親族（娘の子など）が相続人になる（眞田・松村 2000, 69-80）。彼らは，故人の血縁関係にある者としてラヒム（子宮）の複数形のアルハームを冠し，ザウ・ル・アルハームと呼ばれる。つまり，先述の「シラトラヒム」の考え方は，相続でもみられるのである。

法定相続人は，故人の年令によって対象となる者が異なるが，故人と親等が近い女性が入っている点が，男性が優先されたイスラーム教が布教される以前のアラブ社会の相続状況とは異なるといわれている。実際にはさまざまな事例があると考えられるが，この分類に故人と血縁関係にない養子は，含まれないのである。

養子をとることは一般的に忌避されてきたが，それは，血縁関係にない者が加わることによって相続財産の配分が不明確になるだけでなく，財産が父系の系譜で継承されず，まったく異なる血をもつ者に渡ってしまうことを危惧するからである。クルアーンは，直接の血縁関係にない子を実子として養育することを認めないと明記しており（33 章 4-5 節），そのことは国家法にも反映されている（塙 1999, 78-79）。不妊治療として生殖補助医療を利用する場合に，夫婦以外の精子・卵子の使用が社会通念として否定されるのは，生まれた子と家族の血縁関係が明確にならず，家族観と相続に混乱をもたらすためである。

家族にたいする男性の扶養義務

60 代の調査対象者は，上エジプト出身の両親のもとに都市で生まれたが，息子二人と娘五人をもち，とくに初対面の者に自分のことを話すときには必ず子どもの数と，子どもそれぞれの名前をあげ，彼らを結婚させたとか，適齢期であれば婚約させたといったことを好んで話す。相手はたいてい「それはすばらしいですね」と相槌を打つが，そうすると彼は，父親としての役割を果たしたことに満足そうな顔をする。

60 歳の定年まで働き，子を育てあげた父親であると周囲に語ることは，彼にとって自身を説明する重要な要素になっている。それが，彼の評価につながるからである。これは彼だけにみられる特徴ではなく，家族を養い，子どもを無事成人させ，結婚させるまでを自身の務めであると考え，周囲にたいし，子どもを育てあげたことを誇らしそうに語る男性は多い。

父親の務めは，子の結婚後も続く場合がある。調査地で出会った女性は，息子が生まれたにもかかわらず，夫に離縁された。離婚の際，男性側が子をひきとらなかったため，彼女は息子とともに彼女の両親のもとに身を寄せた。家族のなかで男性の年長者は家族成員を守る義務があり，通常は父親が存命中は彼が，父親の没後は彼の息子がその義務を引き継ぐことになる。父親は，娘が結婚した後も，いざとなれば娘を守り，その子も含めて面倒をみる。そうした男性としての社会的義務は，結婚することによって

はじめて果たせるようになる。

結婚とともに扶養の対象として，子どもは重要とみられるが，本項冒頭の60代の調査対象者に，エジプトでは家族が子をもつことが重視されているのかと聞くと，夫婦が必ず子どもをもたねばならないということはなく，それはアッラーが決めることである，と否定した。さらに，筆者は，彼の妹の息子が，結婚して1年たったが，妻が学業継続中であるとの理由から，子どもがまだいないことを耳にしたため，少し珍しいのでは，と聞いてみたが，それは普通のことである，との答えが返ってきた。彼からは，子どもをもたない夫婦もいるし，それは問題のないことである，また，結婚してすぐ子どもをつくらねばならないということもない，とも言われた。

たしかに，男性にとっても，今までみてきたように，子どもの存在は自身の後継者や社会的な地位のために欠かせない存在と思われてきた。だが，必ずしも息子が生まれるとは限らないため，それよりも，男性は，結婚によって妻を養うことで，自身の経済的役割を果たし，社会的な地位を確保できたと考えるようである。また，子が生まれた後も，父親の役割は経済的義務が主であり，愛情は母親に由来するものといわれている（Rugh 1984, 71-72）。男性は，結婚した方が「よりよい」とされ，そのうえ，子どもができたら「喜ばしい」と考える。子どもができるかどうかはアッラーの賜物であったとしても，結婚しなければ始まらないというのが彼らの主張である。

男性にとって，結婚は，自身の経済的な能力を示す機会となる（Ghannam 2013, 72-73）。とくに，エジプトでは結婚するまでに花嫁への婚資や結婚式の開催などで多くのお金がかかり，その費用を貯めるのが，若者にとって最初の試練だといっても過言ではない。仕事をもち，定期的な収入があり，妻子を養えるのが男性の条件とされ，力強さや自由な行動力をもった若者である時期が過ぎた男性は，結婚によって，自身が男性であることを他者に示さねばならないのである。

男性は結婚すべきであるという主張は，独身である筆者へも向けられた。60代にさしかかる独身の男性からは，自分自身を顧みて，「自分は何もなさなかった，おまえには私と同じになってほしくないので，結婚してほし

い」と強く言われた。とくにムスリムはハディースにも妻を養っていけるなら結婚するようにと書かれており，結婚を重視するが，それは，男性が結婚によって課せられた役割を果たすと考えるためである。

ただし，Ｉでふれたような経済的な理由やその他さまざまな理由で，独身である男性はおり，珍しい存在ではない。彼らは，父や夫になる以外の方法で男性であることを示す必要に迫られている。エジプトにおいて，独身男性にたいする視線は厳しく，第一次世界大戦と第二次世界大戦のあいだの戦間期には，とくに中産階級の独身男性を結婚させて責任能力と国家成員としての意識をもたせるため，独身でいる者にたいして独身税の導入も検討されたほどであった（Kholoussy 2014, 17-18）。

男性の経済的役割とは，本項の冒頭にあげた子どもの扶養義務だけでなく，食料の提供者といった意味合いもある。ムスリムのあいだでは，結婚の際に婚姻契約を交わすのが一般的であるが，週に何回肉を家にもって帰るかまでとり決めるという話もある（Hoodfar 1999, 70）。エジプトの男性と話していると，意外と野菜や果物などの食料の値段を知っているだけでなく，品質のよいものがどこで売っているかまで，詳しい者が多い。外出して帰宅する前には，妻に電話をかけて確認し，必要な食料を買って帰る男性もいる。

家に食料をもって帰り，家族を十分に食べさせることができるのが，男性の誇りと考えられている。つまり，結婚は，男性に家族を経済的に養う機会を与え，それによって男性自身が社会的な役割を果たしていると認識するのである（Naguib 2015, 41）。

Ⅲ　生殖補助医療と男性

生殖補助医療の位置づけと実践

先述のように，家族計画は出産数の調整など，妊娠可能な女性をおもに対象とした政策であった。しかし，1980 年代にエジプトでも行われるよ

うになった生殖補助医療は，いままで子どもをもつことをあきらめてきた夫婦に，子どもをもつ可能性を提供した。アレクサンドリアでも，街を歩くと，生殖補助医療を行っている診療所の看板が至る所にみられる。そこには，断片的ながら，人々と生殖補助医療のかかわりが表われている（写真 2-1 参照）。看板は，赤ちゃんの写真や赤ちゃんを抱いた夫と妻の写真などが用いられ，産婦人科で体外受精と顕微授精を行っている旨が書かれているものが多い。医師の名前も書かれているものが多く，男性だけでなく，女性の医師もいることがわかる。街中でみかける看板は大きなものもあり，この医療を必要としている者たちへ，どこに行けばよいかを数々の選択肢とともに示しているようにみえる。

生殖補助医療の規制にかんしては，保健人口省 2003 年第 238 号省令「職業倫理規定」の第 44～48 条に記述がある。この規定では，この技術が不妊治療のために使われ，婚姻関係にある男女の精子・卵子のみを使用すること（第 44 条），夫以外の精子の使用は認められず，受精卵は妻の子宮

写真 2-1　アレクサンドリアの生殖補助医療クリニックの看板（2015 年筆者撮影。※看板の文字の一部を加工しました）

以外に移植できないこと（代理母の禁止，第 45 条），精子卵子バンクの禁止（第 46 条），データの 10 年以上の保管（第 48 条）などが定められている。現在，生殖補助医療にかんしてエジプト全体を統括する組織は，保健人口省も含めて存在しない（Mansour, Abou-Setta, and Kamal 2011, 2）。なお，生殖補助医療を行う診療所は，2013 年に 58 施設であった（巻末付録表付-1 参照）。

エジプトには不妊学会（Egyptian Fertility and Sterility Society）があり，そのホームページをみると，ワークショップや国際年次大会のプログラムが掲載されており，生殖補助医療が議題としてあがっているのがわかる。こうした場では，エジプトだけでなく，世界各国の医師どうしの自発的な情報交換が行われている。

また，生殖補助医療監視国際委員会（The International Committee Monitoring Assisted Reproductive Technologies: ICMART）の世界報告書には，エジプトの医師も参加している。同じ医師が，エジプトの生殖補助医療機関の現状を報告する年次報告書も執筆している。最新の報告書には 2005 年の段階での情報がまとめられている（Mansour, El-Faissal, and Kamal 2014）。後述する情報は，政府が生殖補助医療にかんする情報を提供していないため，この報告書に依拠した。こうした現状から判断すると，生殖補助医療は，上記の保健人口省の省令や各診療所の医師自身の良識に従って実施されていると思われる。同様に，宗教的な指針も大きな役割を果たしている（詳しくは第 1 章を参照）。

アレクサンドリアではじめての人工授精は，1988 年にアレクサンドリア大学付属病院で実施された。生殖補助医療の導入初期から，人工授精は配偶者の精子のみを使っており，非配偶者からの提供精子については宗教的な抵抗感があったといわれている（Inhorn 1994, 331）。顕微授精のエジプトへの導入時期は不明であるが，1990 年代前半にベルギーではじめての成功例が出た後に，その技術はエジプトでも導入されたとみられる。

顕微授精は，多くの不妊男性に自身の精子を利用して子をつくる方法を提供した（Inhorn 2003, 244）。とくに，状態のよい精子を選別でき，顕微操作により直接卵子に挿入できる点で，シャーレのなかにある採卵された

卵子に精子を振りかけて自然受精させる体外受精よりも確実性が上がり，不妊男性に恩恵をもたらした。現在，エジプトの生殖補助医療を行っている病院では顕微授精の割合が多く，成功率も高い（Mansour, Abou-Setta, and Kamal 2011, 6）。新鮮な胚をそのまま移植するだけでなく，凍結胚移植も行われている。

費用については病院ごとにちがう可能性もあり，カイロのアズハル大学付属病院は市場の 3 分の 1 ほどの費用で利用できるため，多くの貧しい者たちが通っているとの情報もある（El Feki 2013, 81）。また，彼らの経済状況によっては，さらに費用の割引があるそうである。

生殖補助医療の普及にかんする最新のデータとしては，おもにカイロの生殖補助医療に従事する医師たちによる 2005 年の調査結果をまとめたものがあり，18 の診療機関が参加している（Mansour, El-Faissal, and Kamal 2014, 17）。これによれば，2005 年の体外受精の治療実績は 1 万 353 サイクルであり，出生数は 3352 人であった（Mansour, El-Faissal, and Kamal 2014, 21）。限定された数字であり，このほかの診療所の具体的な数値は不明であるが，それでも 2005 年時のエジプトの出生数が国連統計によると約 180 万人なので，出生数全体に占める割合は圧倒的に小さい。エジプトでは，子はもつものであるという社会的な観念が根強くあり生殖補助医療への潜在的な需要は高い半面，費用と設備面の整備が遅れているという指摘もある（Mansour, El-Faissal, and Kamal 2014, 18-19）。

2015 年夏に行ったアレクサンドリア大学医学部付属シャトビー病院での聞きとり調査によれば，体外受精の費用は 1 サイクル当たり 1 万 5000 から 2 万エジプトポンド（約 23～31 万円 ―2015 年調査時の換算レート 1 エジプトポンド 15.3 円による―）だった。費用は個人負担であり，政府からの補助はないが，貧しい者は民間の相互扶助団体などから金銭的援助を受ける場合もある。エジプトでは相互扶助団体の活動が活発であり，さまざまな金銭的援助が助けを必要としている者にたいして行われているので，そうした団体を利用する者もいると考えられる。この病院での成功率は 40％であると説明を受けた。一方，私立の診療所は費用が高い分，成功率は上がるとのことだった。

調査対象者のあいだでは，生殖補助医療の利用にかんして，世界のほかの地域では第三者からの精子・卵子の提供を受ける方法も用いられていることについて，強い拒否感をもって受け止め，私たちには決して受け入れられない方法だと，否定する者が多数であった。拒否感の背景には，伝統的な家族観と親子の血縁関係の重視がある。生まれた子が自らの子であることを担保できるのは，診療に用いる精子・卵子を夫婦のものに限定するからである。

生殖補助医療は，子どもができにくい夫婦が受けるひとつの医療行為として，夫婦の精子・卵子を用いるという前提であれば問題なく彼らのあいだで受け入れられている。だが，聞きとりを行った男性たちのうち，既婚者は全員子どもをもっており，孫をもつ者でも彼らの子どもたちそれぞれに，子どもをもつうえで，生殖補助医療を利用したことがある，または現に利用していると回答した者はとくにいなかった。こうした事情のため，調査で得られた回答は，身近に誰かが利用したという実感のない知識としての範囲を出なかったのかもしれない。

エジプトでは，宗教的に養子が認められていないが，法的には病院などの前に遺棄された子などを自らの子とする際に，父親となる人間がその子を生物学的な子であると裁判所で宣言する必要があるなど厳格な手続きが必要とされており（Inhorn 1996, 195），親と子の血縁関係は重視されている。Ⅱで相続についてふれたが，夫と妻の精子・卵子のみで生殖補助医療を行うのは，生まれた子をその家族内の血縁関係に正確に位置づけるためであり，子の出自を混乱させないためである。

つまり，エジプトでは，従来の血縁関係が変更されるような生殖補助医療の導入は受け入れないということである。夫と妻の精子・卵子を用いてつくられた，胚（受精卵）を妻の子宮に戻す以外の治療が認められていない。中東諸国以外の国々では生殖補助医療は第三者の精子・卵子を用いることで，新たな関係性を家族のなかにもち込んできたが，エジプトでは，彼らの倫理観にもとづき，あくまでも従来の家族関係の枠内で，いわばその関係性を維持する方法に限定されたのである。

しかし，筆者が話を聞いた男性は，生殖補助医療について知っているか

をたずねた際,「科学の進歩は，宗教よりも早い」と，現在の限定的な利用にかんする考えがいつまでも変わらないとは限らないと語った。第三者の精子・卵子の利用がエジプトで認められるには，第１章で詳しくふれられているように，ファトワーによる見解が大きな役割を果たしているが，いまだ実現はされていない。しかし，本章が対象としたスンナ派のエジプトとは異なり，シーア派が多いイランやレバノンなどでは生殖補助医療にかんしてさまざまなちがいがある。たとえば，レバノンでは，一時的な婚姻を結ぶ必要があるが，提供卵子による生殖補助医療の利用が認められている（Clarke 2007, 298）。

男性の立場から男性不妊と生殖補助医療を考える

生殖補助医療の治療において男性のもっとも重要な役割は精子の提供である。その採取方法が現地の男性になじみがないとしても，難しいものではないはずである。それにもかかわらず，エジプトにおける生殖補助医療を扱った先行研究では，医療の現場で，女性に比べ，男性が消極的でかかわりをもとうとしない事例が紹介されてきた（Inhorn 1994, 329; 2005, 294）。そこでは，仕事をもっている男性にとって日中の診察時間に病院に行くのが難しいというような問題が指摘された。

しかし，問題は，不妊の原因が自身にあると考えようとしない男性が多いという点にあるだろう。男性にとって，検査であっても，精子を病院で採取されることは屈辱的な経験なのである（Ali 2002, 128-129）。さらに，男性は，精子を検査されるよりも別の女性との再婚を選ぶという報告もある（Inhorn 1996, 118）。また，男性のなかには精子の採取を行うために，病院で自慰をさせられることにたいして，宗教上で禁止された行為であるとして抵抗感を示す者もおり（El Feki 2013, 82），こうした抵抗感が彼らに生殖補助医療へのかかわりを困難なものにさせている。

男性が精子の検査などに消極的な理由は，自身の性的能力を疑われるからだけでなく，自身が果たすべき役割とも結びつけて考えるからとの指摘がある（Inhorn 2005, 289）。たとえば，彼らは，家族のなかで，稼ぎ手と

して物質的な提供者であるだけでなく，性的な意味でも精子の提供者であることが求められているため（El Feki 2013, 74），検査によって自身が不妊であると明らかになり，自らの役割を果たせないと解ることを恐れるのである。

とくに，男性不妊は，男性自身に自分は男性ではないと思わせる（Inhorn 2012, 70）。健康な男性は生涯にわたり性的な活力に満ちた存在であるとされ（Hoodfar 1999, 254），男性不妊は恥ずべきことであり，女性にとってもよい存在ではなく，不完全であると考える男性もいる。男性不妊は，男性から子の父親としての立場も，男性としての活力も奪うのである（Inhorn 2003, 248-249）。

また，名誉を重んじ，力強い存在であることを望む男性は，他者からの評価により自己を確立するが，老いや病気によって必ずしも想定されるようにつねに強くいられるわけではない。そうした力強い状態をみせられず，弱さをみせる男性にたいして，周囲は衝撃を受けるのである（Ghannam 2013, 140）。

男性の理想像から外れるような弱さに遭遇した周囲の男性は，なるべくその状態にふれないようにする。その弱さを嘲笑するような行為は，恥ずかしい行為として責められる。たとえば，病院とは弱い存在である女性や子どもが行く場所であり，強さの象徴である男性は行かないとされる（Ali 2002, 128）。そのため，調査対象者が，病院に入院した男性を見舞う場面では，ときに気を遣う状況にもなった。弱った状態をさらす男性にたいして，見舞い客は「元気を出しなさい」などと声をかけると同時に，彼がみせる弱さに「大したことはないですよ」と優しく接する姿がみられた。

不妊の場合も似た対応がとられると考えられ，男性が不妊だとはっきりとわかったとき，彼の家族は，その事実を隠す傾向にあるという（Inhorn 1996, 167）。それは，不妊が男性の立場を危うくし，彼だけではなく，彼の父や兄弟などほかの男性家族成員にも同様の疑いがかけられ，彼らの名誉にもかかわるからである。エジプトでは，男性不妊とは，語られない経験であるだけでなく隠されるため，他者と共有されない経験であり続けている（田中 2004, 218）。

男性の治療への消極的な態度とは対照的に，女性は治療への積極的なかかわりが指摘されてきたが，これは，不妊の理由は女性に求められる傾向が強く，女性自身も妊娠することが当たり前だと考える風潮による（El Feki 2013, 81）。不妊の原因は女性側に求められ，すべての検査が済んで問題がないとされるまで，男性は疑われない（Hoodfar 1999, 243）。

女性が不妊の場合，夫と妻双方の家族・親族に知れわたることが多いのにたいして，男性に不妊の原因がある場合は男性の妻がその恥を引き受け，夫婦間の秘密として隠す傾向にあるという（Inhorn 2012, 70）。さらに，男性は，女性が不妊であった場合，離婚か複婚を本人の意思だけでなく，彼の親や親族からの圧力により選択する可能性があるが，男性が不妊の場合，妻の親族は彼が妻を愛していれば離婚を求めないという（Inhorn 1996, 117-118）（エジプト女性をめぐる出産と子どもの関係については，第3章を参照）。なお，男性不妊は，女性側からの数少ない離婚理由としてあげられている（Inhorn 1996, 30）。そのため，子どもができない場合，離婚を選択する可能性は十分あるが，女性からの離婚の申し立ては，男性不妊と結びつけられ，男性の立場を脅かすのである（Sonneveld 2012, 69, 80）。

調査地で出会った夫婦は，第一子である男子を出産後に次の子をなかなか妊娠できなかったため，ともに病院に行って検査を受けたが，結果として，夫側に問題はなく，妻の子宮に問題があることがわかった。エジプトでは，先述のとおり，第三者からの精子・卵子提供は認められず，子宮の提供に当たる代理懐胎も認められないため，妻の子宮に問題があるこの夫婦は生殖補助医療を用いて子をもつことはできず，夫はさらに子どもが欲しかったら複婚を選択するしかない。しかし，夫は，複婚を考えたこともあったが，6年たったいまでも結婚費用の面などで行っていない。妻は自身の父方オジの娘であり，同じアーイラ内での結婚であるため，離婚は考えなかった。

ただし，子どもができないからといって，早急に夫婦どちらかに問題があると判断するよりも，夫婦間の相性の問題と考えようとする場合もある。筆者の友人の知り合いで離婚したある男性の離婚理由は，その男性が（性的に）「弱い」ことにあり，その友人からバイアグラをもらっていたが，

解決にはいたらなかった。その後再婚するにあたり，こんどは問題ないとその友人に本人は言っていたそうで，実際にその１年後，彼は男子をもうけた。筆者の友人の説明によると，最初の妻に問題はなかったとのことである。

バイアグラは自身に性的な問題を抱える男性に効果的な薬であると同時に，調査地では，その利用について，子どもをつくるために使うというよりも，年齢とともに減退する精力の補助薬として利用されていた。60代の男性も使用経験があり，バイアグラの種類について知識があった。男性が妻との関係で抱える悩みには，妻を満足させ，性的に支配できる活力をいかに得るかがあり（Ali 2002, 132-133），こうした薬の使用もそのなかに入ると考えられる。もっとも，バイアグラの使用は，予想とはちがって，強い存在であらねばならない男性の悲哀とともに必ずしも語られるわけではなく，むしろ楽しみとしての側面が彼らの話から感じられた。

この薬の利用が話題になる場面では，男性の社会的立場を傷つけるようには話されない。それどころか，あからさまに話されることはないとしても，男性のあいだではどれがよいか，といった情報交換やときにはバイアグラそのものがわたされることがあり，興味をもっている男性は多かった。ただし，この薬は，おそらく夜の営みと関係するからか，堂々とみせるというよりは，隠れてやりとりする感覚がある。それにもかかわらず，なかには，ふざけているときや自身の妻との親密さを表現するために，人前で薬をみせる者もいる。しかし，そうした行為は，彼の周囲の人々すべてが同調するとは限らず，恥ずかしいものととらえられる場合もある。

バイアグラも生殖補助医療も医学の発展とともに登場したが，両方ともエジプト人男性の生き方に影響を与えたと考えられる。エジプトでは子の誕生において，男性の生殖物質が重視され，女性がそれを正常に体内で育てられない状態が不妊とされてきた（Inhorn 2003, 246）。家父長制のもと，男性は，誰もが一家の長になる可能性を秘めており，病気とは無縁の存在として，自身の系譜を継ぐ子をなす力をもっていなければならなかったのである。

ところが，生殖補助医療の登場は，精子を検査の対象にし，男性にも不

妊の原因がある可能性を明らかにした。これまで男性がもつ生殖面での役割は，妻に不妊の原因を負わせることで脅かされなかった。しかし，生殖補助医療は，つねに男性には問題がないという前提を覆し，不妊の原因を男女双方に平等に求めたのである。

ただし，男性は，生殖補助医療の登場を脅威と受けとめた一方で，不妊の原因の特定により，その解決方法として顕微授精のような方法を新たな可能性として得た（Inhorn 2003, 244）。この医療により，不妊が治療可能であることが解り，男性は，自身が不妊であった場合に，自らの問題として，治療を受けるようになったといわれる（Inhorn 2012, 27）。いままで男性と子とのかかわりは経済的な扶養に重点がおかれてきており，子の誕生に自らがいかにかかわるかは明確ではなかったが，その意識は今後変わるかもしれない。それには，男性不妊が生殖補助医療の普及とともに，語りうる経験になれるかが課題である。

拡大家族のなかでの夫婦

筆者には，都市での上エジプト出身者を調査するなかで，数年前に知り合った60代の子のいない夫婦がいたため，今回の調査の内容について話し，いろいろと聞こうとした。この夫婦は，彼らの年齢を考えると，生殖補助医療の普及前に子どもができない問題に直面したと思われる。この話題は，おそらく過去に繰り返しなされたかもしれず，あまり進んで話したい内容でもなかったようで，妻から「子どもは神の賜物であるが，私たちには愛があり，いまの生活に満足している」と，筆者には結婚を勧めながらも，手短にすまされてしまった。

共働きである彼らは仲のよい夫婦であり，子どもがいなくとも，双方の兄弟姉妹が彼らの子を連れて頻繁に訪れ，彼らとともに郊外にある妻の姉妹が所有する別荘に出かけることもある。オイやメイとの交流もあるため，夫婦二人でいながら，誰かがともにいることが多い。

また，Ⅱで紹介した上エジプト出身者と同郷の男性は，彼の家族と彼の三人の兄弟の家族とともにひとつの建物にまとまって住んでいる。四人の

兄弟には，それぞれ三人から四人の子どもがおり，長兄である男性の娘とその夫と子も同じ建物に住んでいる。この建物は，彼らのアーイラ専用であり，建物の入り口は大きな鉄扉で閉ざされているが，各階それぞれの住居のドアは開かれていることも多く，子どもたちがお互いの住居を行き来している。子どもたちは，つねに自分のイトコたちとともに遊び，自身のオジやオバと接する機会をもっている。

アーイラは，家父長制の理念をもつと同時に出自にもとづいて多くの人々を結びつけてきた。上記の調査地での知見によると，男性には，アーイラ内で子の親になる以外に，父方オジとしての役割があると考えられる。父方オジは，親の代わりに，オイやメイにたいして，相談相手や金銭的な援助，甘えの対象などさまざまな役割を担い，アーイラ内で一定の存在感を発揮できる。一方，オイにとって父方オジは，もし父方オジに実子がいなければ，息子の代わりとして葬儀の際に喪主を務めなくてはならない関係にある。父系の継承を目的として，男子の誕生が夫の父親から求められるが，兄弟が数人おり，彼らのうちの誰かが男子をもうければ，アーイラとしての規模は縮小するが，父系は次世代へと続くのである。

家族計画が浸透し，核家族化する傾向にあるなかでも，上エジプト出身で都市在住の者たちのあいだでは，世帯を超えたアーイラとしてのつながりが残っている。インホーンは拡大家族成員による干渉が不妊夫婦の関係に悪影響を及ぼすと述べ，家父長制を基盤とした拡大家族にたいして批判的な見方を示してきた（Inhorn 1996, 149）。また，家父長制は，女性だけでなく男性にも，家族をつくり，父系の系譜を継ぐ男子をもつように圧力をかける側面があった（Inhorn 1996, 166）。だが，筆者自身の調査経験から，拡大家族のなかで暮らすことは，家父長制の系譜を存続させるための圧力があるかもしれないし，また夫婦のあいだに子どもがいない状態の解消になるとは限らないが，しかし同時に，多くの人間とのかかわりをもつ点で子のいない夫婦を孤立させない状態をつくっているともいえるのである。

さらに，エジプト社会において，女性は，おもに男性の保護下におかれるべきであり，経済的に自立してひとりで生きていく存在とはみなされてこなかった。そのため，女性が離縁されると，女性の実家または男性親族

が彼女の新しい保護者になる。一度結婚して彼らの保護を離れたにもかかわらず，離縁されて戻ってくることを，周囲も，本人も恥と考える（Inhorn 1996, 121-122）。夫からの扱いが悪くとも，女性が離婚を思いとどまるのは，こうした理由がある。

一方，家族のなかで，従来男性が守るべき女性とは自身と血縁関係にある母や姉妹，娘であるが，結婚によって妻が夫方居住のために婚入し，新たな女性として加わる。男性は，後者を，父系成員のなかの他者として扱う前者から守り，扶養する義務がある。そして，妻も夫が働き収入を得て自らの役割を果たせるように彼を支え，家長としての彼の立場を尊重する。こうした夫婦関係の確立は，子どもの有無とは別に存在しうる。

いままで，夫婦という単位は，拡大家族のなかの一部であり，独立した単位としては考えられてこなかった。しかし，生殖補助医療の登場により，夫婦は，子をもつ当事者として注目されるようになり，お互いの協力が治療のうえで求められるようになった。Ｉでふれたように，家族計画や出稼ぎ労働も含めた経済状況のなかで，伝統的な家族観としてのアーイラの規模は縮小傾向にあるが，この傾向は，人間関係の広がりを阻むものではない。アーイラ的な家族のつながりを保ちつつ，夫婦二人という関係が生殖補助医療の治療過程で理解されるようになれば，不妊への見方や対応は変わる可能性もあるだろう。

おわりに

エジプトにおいて家族とは，世帯の外側に広がる多くの成員との関係も含めて成り立ってきた。だが，その家族観は，国家による家族計画などの政策で変容を促されてきた。男性は家族への経済面と生殖面の両方で提供者としての役割を果たしてきたが，国家の政策は，経済面で男性に影響を与えた。さらに，生殖面では，男性不妊が男性の役割を阻害する側面があった。

生殖補助医療は，子どもをもてない夫婦に可能性を与えたが，それだけ

でなく，家族の形成に明確な出自を求められる国だからこそ，大きな恩恵となった。不妊男性にとって，顕微授精の導入は，自身の子孫を残せる可能性を見いだせるようになった点で，彼らに喪失した役割を果たせるようにさせただけでなく，一家の長になれる可能性を与えたのである。

調査対象者のなかで，生殖補助医療を利用した者はいなかった。また，男性不妊であるという者にも出会えなかった。だが，男性不妊である者がおかれる状況は，本章を通じて男性が家族のなかで果たすべき役割をあげたなかで理解できるだろう。

また，夫婦に目を向けてみれば，彼らは，自身の子をもつために生殖補助医療を利用するが，同時に家族とは何かを考える機会を得るだろう。子どもに高い価値をおく社会において，夫婦は，自らの家族はどのような子をもちたいか，子が必ずいなくてはならないか，それとももしかしたら，子がいなくとも夫婦二人で幸せに暮らせるか，を考える時間をその治療過程でもてるはずである。

夫婦で不妊に直面する問題を共有できたときに，治療は意義をもつものになるにちがいない。また，男性にとっては，単に経済的な役割として父親になる以上に，子どもの誕生により意識的にかかわる経験となるかもしれない。家族計画の普及は国家の政策であったが，生殖補助医療は，治療を受ける人々が主体となった。つまり，夫婦が家族について，自分たちで考えられるような時代が来たのである。

そして，夫婦を基点に家族を考え，子どもをもつかどうかを夫婦の選択に任せるような社会になったとき，男性は，たとえ自身が不妊であったとしても，その事実を受け入れ，家族のなかでの役割を見直せるのではないか。生殖補助医療のさらなる普及は，こうした変化を後押しする一助になるだろう。

〔注〕

⑴　中東における家族・親族概念は，日本語で想定される同様の概念よりも広い範囲の者を含む場合がある。日本と同じ適用範囲の場合，漢字で記載するが（父，母等），日本よりも広い範囲の者を含んで使われる概念については，カタカナで記し

た（オジ，イトコ等）。なお，この適用範囲の広さは，本節で述べられているように，アーイラによる家族観に支えられている。

〔参考文献〕

＜日本語文献＞

大塚和夫 1983．「下エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書」『国立民族学博物館研究報告』8(3)　563-586．

岡戸真幸 2012．『エジプト都市部における出稼ぎ労働者の社会的ネットワークと場をめぐる生活誌』上智大学アジア文化研究所 Monograph Series，上智大学アジア文化研究所．

――― 2015．「エジプト都市部で同郷者団体が果たす役割と意義――アレクサンドリアのソハーグ県同郷者団体の事例から――」『日本中東学会年報』31(1)　29-62．

木村喜博 1973．「農地改革前におけるエジプト農村社会の構造――共同体的構成の視角から――」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所　267-313．

眞田芳憲・松村明編 2000．『イスラーム身分関係法』　中央大学出版部．

田中俊之 2004．「『男性問題』としての不妊――〈男らしさ〉と生殖能力の関係をめぐって――」村岡潔・岩崎晧・西村理恵・白井千晶・田中俊之『不妊と男性』青弓社　193-224．

中岡三益 1970．「エジプトにおける伝統的社会と西欧の衝撃」後進国経済発展の史的研究－昭和 44 年度中間報告（そのⅡ），アジア経済研究所所内資料 45(3)　89-137．

――― 1973．「エジプトにおける共同体――財産占取の形態と主体に関するノート――」川島武宜・住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所　257-266．

塙陽子 1999．『イスラム家族法（研究と資料）2――エジプト・レバノン・トルコ・付イスラエル――』信山社．

＜英語文献＞

Ali, Kamran Asdar 2002. *Planning the Family in Egypt: New Bodies, New Selves*, *Austin*: University of Texas Press.

CAPMAS (Central Agency for Public Mobilization and Statistics) [Various years]. *The Statistical Yearbook*, Cairo: Central Agency for Public Mobilization and Statistics.

Clarke, Morgan 2007. "The Modernity of Milk Kinship," *Social Anthropology* 15(3): 287-304.

El Feki, Shereen 2013. *Sex and the Citadel: Intimate Life in a Changing Arab World*, Toronto: Anchor Canada.

Ghannam, Farha 2013. *Live and Die Like a Man: Gender Dynamics in Urban Egypt*, Stanford: Stanford University Press.

Hoodfar, Homa 1996. "Egyptian Male Migration and Urban Families Left Behind: 'Feminization of the Egyptian Family' or a Reaffirmation of Traditional Gender Roles?" In *Development, Change, and Gender in Cairo: A View from the Household*, edited by Diane Singerman, and Homa Hoodfar, Bloomington: Indiana University Press, 51-79.

——— 1999. *Between Marriage and the Market: Intimate Politics and Survival in Cairo*, Cairo: The American University in Cairo Press.

Inhorn, Marcia C. 1994. *Quest for Conception: Gender, Infertility, and Egyptian Medical Traditions*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

——— 1996. *Infertility and Patriarchy: The Cultural Politics of Gender and Family Life in Egypt*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

——— 2003. "'The Worms Are Weak' : Male Infertility and Patriarchal Paradoxes in Egypt," *Men and Masculinities* 5(3): 236-256.

——— 2005. "Sexuality, Masculinity, and Infertility in Egypt: Potent Troubles in Marital and Medical Encounters," In *African Masculinities: Men in Africa from the Late Nineteenth Century to the Present*, edited by Lahouchine Ouzgane, and Robert Morrell, New York: Palgrave Macmillan, 289-303.

——— 2012. *The New Arab Man: Emergent Masculinities, Technologies, and Islam in the Middle East*, Princeton: Princeton University Press.

Kholoussy, Hanan 2014. "Internationalizing Interwar Egypt's Bachelor Tax Proposal: The Emasculation of the State and Its Single Sons," In *Masculinities in Egypt and the Arab World: Historical, Literary, and Social Science Perspectives*, edited by Helen Rizzo, Cairo: The American University in Cairo Press, 12-31.

Mansour, Ragaa T., Ahmed Abou-Setta, and Ominia Kamal 2011. "Assisted Reproductive Technology in Egypt, 2003-2004: Results Generated from the Egyptian IVF registry," *Middle East Fertility Society Journal* 16(1): 1-6.

Mansour, Ragaa, Yahia El-Faissal, and Ominia Kamal 2014. "The Egyptian IVF registry report: Assisted Reproductive Technology in Egypt 2005," *Middle East Fertility Society Journal* 19(1): 16-21.

Naguib, Nefissa 2015. *Nurturing Masculinities: Men, Food, and Family in Contemporary Egypt*, Austin: University of Texas Press.

Pollard, Lisa 2005. *Nurturing the Nation: The Family Politics of Modernizing, Colonizing, and Liberating Egypt*, Berkeley: University of California Press.

Rugh, Andrea B. 1984. *Family in Contemporary Egypt*, Syracuse: Syracuse University Press.

El-Shakry, Omnia 2007. *The Great Social Laboratory: Subjects of Knowledge in Colonial and Postcolonial Egypt*, Stanford: Stanford University Press.

——— 2016. "Reproducing the Family: Biopolitics in Twentieth-Century Egypt," In *Reproductive States: Global Perspectives on the Invention and Implementation*

of Population Policy, edited by Solinger, Rickie, and Mie Nakachi, Oxford: Oxford University Press, 156-195.

Sonneveld, Nadia 2012. *Khul' Divorce in Egypt: Public Debates, Judicial Practices, and Everyday Life*, Cairo: The American University in Cairo Press.